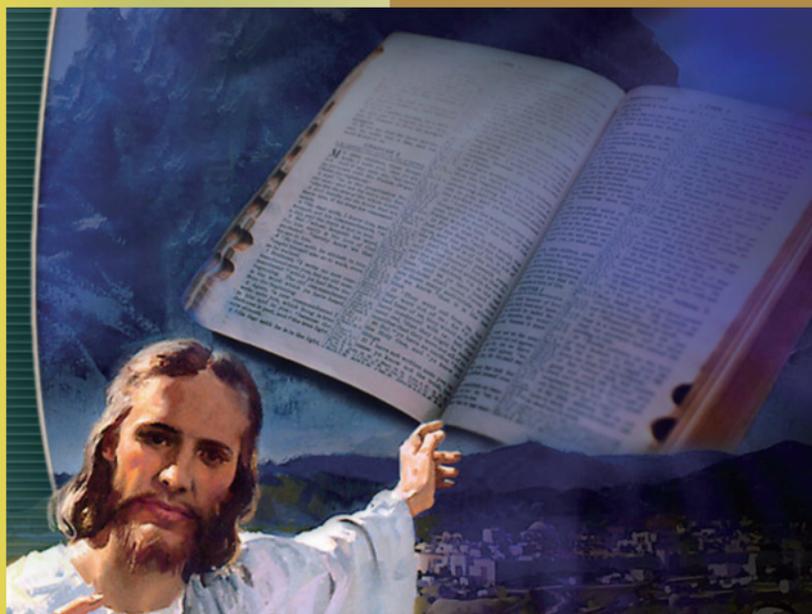


*Lesser Light and  
Greater Light*

小さな光と大きな光

Revival Booklet Series No.9



リバイバルシリーズ No.9

ローレンス・ネルソン



SUNRISE MINISTRY

# 目次

## Contents

---

---

～ 第1部 ～	1
「大きな光と小さな光」	3
聖書の証	8
文脈	11
自然からの例証	14
義の太陽を反射する	17
証を無効にする	20
もう一つの重要な考察	21
～ 第2部 ～	23
序論	23
伝道と証の書の使用	27
証の書を用いるべき時	29
神からの証の拒絶	34
驚くべき背教	37
あなたが聞きたいもの	43
もっと詳しく研究なされたい方のために...	48

## ～ 第 1 部 ～

時々刻々と最後の危機が近づいている！ 靈感の書は、「まもなく圧倒的な驚きとして世を襲うところの」事件、かつてなかったほどの悩みの時の到来を描写している。神はこの終わりの時の出来事を前もって知っておられる。神は、聖霊の特別な助けがなければ、サタンの大いなる力の前に我々は立つことができないことを知っておられる。サタンは近い将来、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないように」するであろう（黙示録 13:16, 17）。終わりの危機に備え、通過できるために、聖書と同じように、預言の霊が与えられていることを、我々はどれほど感謝すべきであろうか。これが我々に勝利を確信させるものである！ み言葉によってのみ、神が忠実に条件を果たす者たちと共におられるという確信が与えられるのである。これらの靈感の言葉に、悩みの時を通過する時に守られるための条件が明確にされているのである。

聖書から学んでみよう。

「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそ

う確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」Ⅱペテロ 1:19-21。

エレン・ホワイトは聖霊について次のように書いている：

「聖霊は、聖書にとって代わるために与えられたのではないし、また、そのようなものとして与えられるはずもないのである。なぜなら、神のみことばは、すべての教えとすべての経験を吟味する標準であると、はっきり聖書に述べられているからである。使徒ヨハネは言っている。『すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである』（ヨハネ 4:1)。そしてイザヤは、『ただ律法と証とに求めよ。もし彼らの言うことがこの言葉に従っていないなら、それは彼らの内に光がないからである』と宣言している（イザヤ 8:20 欽定訳

)」大争闘序(4)。

預言の霊の書は、聖書のあらゆる試験にパスした！それは神の言葉に忠実であることが判明した。確かにエレン・ホワイトは、古代の預言者たちによって与えられた光を更に拡大し、彼らの言葉をさらに明瞭なものとし、我々の時代への特別な適用をほどこして、さらに理解し易くしている。

主はご自分の使者を通して語られた：

「**聖霊が聖書と預言の霊の著者である**」セレクトッド・メッセージ 3-30。

「**聖書があなたのカウンセラーである**。神が与えられた**聖書と証**を研究しなさい。なぜなら、それらは決して矛盾することはないのである」3SM 32。

従って、聖書と預言の霊の両方の著者は聖霊であるのだから、その両方とも、その主たる目的は男女を世の光であり、我々の救い主に導くことである！

## 「大きな光と小さな光」

.....

わが教会の中でよく用いられる二つの引用文がある。しかし、しばしば文脈から離れて用いられている。

これらの文章（引用文）は個人によってのみならず、教会の指導者達によってもしばしば曲解され、誤用されている！ そこで、この研究では、これら二つのうちの一つの引用文のその本当の意味を探ってみよう。二番目の引用文は第二部で研究することにする。

最初の文章はレビュー誌 1903 年 1 月 20 日から採られたものである：

「聖書にあまりにも注意が向けられていない。主は男女をより大きな光に導くために小さな光を与えられた」。

すぐ投げかけられなければならない質問はこれである：小さな光とは何なのか？より大きな光とは何なのか？この点でサタンは主の僕の書物に対する信頼を破壊し始めたのである！

では、この誤解され易い表現の意味を理解する最善の方法は、その著者が言わんとしている事は何かということ著者自身に聞くことである。

エレン・ホワイトは、聖霊が彼女の思想に靈感を与えたのであるから、その意味するところも説明しているに違いない。故に、しばしば引用されるこの文の前後関係を、我々は読む必要がある。

エレン・ホワイトは他にも小さな光、大きな光という表現をいくつかしている。この問題を解決するために、他の引用文を見ることも助けになる。

初めの文は、預言の霊二巻の 83、84 頁にある。それはヨハネの働きについて説明していることを、念頭において頂きたい：

「預言者ヨハネは、二つの時代を結ぶ輪であった。彼は続いてやってくる**大きな光**に対して**小さな光**であった。彼は、人々がキリストの働きを受け入れる準備をするために、伝統に対する信頼を捨てさせ、彼らの罪を思い出させ、悔い改めに導くのであった。神は預言者に、靈感によって彼の理解に照明を授けられた。そして彼は、幾世代も積み重ねられてきた偽りの教えを持つ正直なユダヤ人から、言い伝えと暗黒を取り除くのであった。

しかし、キリストの奇跡を目撃し、その唇から天来の教えと慰めの言葉を受けた最も小さな弟子でさえ、バプテスマのヨハネよりもっと大きな特権にあずかった。イエスの教えと模範から発せられたもので、これほどはつきりと人類に輝いた光はこれまでになかったし、またこれからもないであろう。キリストとその働きは、影であり、型である犠牲の中にかすかに理解され、予表されてきた

のであった。

預言者のうちで、ヨハネほど高い任務、または働きを授けられた者はなかった。しかし、彼は自分の働きの結果さえ見ることができなかった。彼は、キリストと共にいて、天来の力が伴う大いなる光を目撃する特権にあずかれなかった」。

天来の力が伴う大いなる光とは、誰のことだろうか？ 大いなる光とは、キリストのことであることには疑いの余地がない。この文は、大いなる光はキリストであると明言している。小さい光は誰であるとエレン・ホワイトは言っているか？ 預言者ヨハネのことである！ 彼女は間違いの余地を与えないほど、これら二つの言葉を定義づけているのである！ 彼女の他の文章を見ても、彼女が一貫していることが分かる。

では、二番目の引用文のレビュー誌 1873 年 4 月 8 日の文を検討しよう。ここで、エレン・ホワイトは次のように言っている：

「ヨハネはこの地上に神が送られた最も偉大な預言者の一人である。…キリストは、バプテスマのヨハネより大いなる預言者はいない、彼は預言者以上の者であると言われた。」

この文脈でエレン・ホワイトは、「ヨハネは小さな

光であり、大いなる光が後に続いて来るはずであった」  
と語っている。ヨハネに続いてくる大いなる光とは誰  
のことであろうか？ 誰もが、それはイエスであると答  
えるであろう！

次に、第三番目の引用文を各時代の希望第一巻の  
274, 275 頁に見てみよう。

「預言者ヨハネは、二つの時代をつなぐであった。  
神の代表者として、彼は、キリスト教時代に対す  
る律法と預言者の関係を示していた。彼は小さ  
な光で、そのあとには大きな光がつづくのであつ  
た。ヨハネが彼の民に光を放つように、彼の心は  
聖霊に照らされていた。しかしイエスの教えと模範  
から出ている光ほど墮落した人類を明るく照す光  
は、これまでほかになかったし、またこれからも  
ない。影としての犠牲制度に象徴されているキリ  
ストとその使命は、かすかにしか理解されていな  
かった。ヨハネでさえ、救い主を通して与えられ  
る未来の永遠のいのちを十分に理解していなかつ  
た。

ヨハネが自分の使命に感じていたよろこびは別と  
して、彼の一生は悲しみの一生であった。彼の声  
は荒野よりほかのところではめったにきかれな  
かった。彼は孤独な身分であった。彼は自分自身

の働きの結果を見ることをゆるされなかった。キリストといっしょにいて、大きな光に伴う神の力のあらわれを見る特権は彼になかった。盲人が見えるようになり、病人がいやされ、死人がよみがえさせられるのを、彼は見なかった。彼は、キリストのすべてのことばを通して光が輝き、預言の約束が栄光に照されるのを目に見なかった。キリストの大いなるみわざを目に見、キリストのみことばを耳に聞いた最も小さい弟子でさえ、この意味において、バプテスマのヨハネよりも大きな特権があった。したがってヨハネよりも大きい者といわれているのである。」

この文によると、結論は一つしかない：ヨハネは小さい光であり旧約の律法と預言者と、大いなる光であられるキリストとの関係を示し、キリストはヨハネの後に来られることになっていた。

## 聖書の証

.....

聖書はエレン・ホワイトの定義が正しいことを強めている！

ヨハネ 1:6-9 :

「ここにひとりの人があって、神からつかわれ

ていた。その名をヨハネと言った。この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。彼は光ではなく、ただ、光についてあかしをするためにきたのである。すべての人を照すまことの光があって、世にきた」。

ヨハネ 5:35, 36 でイエスは言われた：

「ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間その光を喜び楽しむとした。しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかし(光)がある」。

ヨハネ 9:5 にも次のように書いてある：「わたしは、この世にいる間は、世の光である」と。キリスト以前にも、以後にも世に明るく輝く光がなかったとすれば、旧約聖書と新約聖書のすべての預言者が小さい光であることには疑いの余地がない！

四つの引用文において、エレン・ホワイトは旧約時代を小さい光と言っていて、新約時代を大いなる光と言っている。

「This Day With God (神と共なる今日) 246 頁から引用しよう：

「キリストの初臨から大いなる光と栄光の時代が到来した。しかし、より完全な輝く光が照りわたったからといって、小さい光を軽蔑しあざ笑うことはまことに罪深い忘恩である。

ユダヤ時代の祝福と栄光をさげすむ者は、福音の宣教による益を受ける準備ができていない」。

このように、エレン・ホワイトは彼女自身の定義から逸脱していないことを我々は見ることができる。キリストの初臨から大いなる光と栄光の時代に入ったとするなら、旧約の預言者たちは、ユダヤ時代に小さな光と栄光をもたらしたのであった。この時代に、キリストの出現によってもたらされる大いなる光に導く聖所の奉仕が確立されたのであった。

さて、これで、我々はレビュー誌 1903 年 1 月 20 日の引用文の意味を理解する用意ができたと思う。この引用文を用いて、我々の説教壇や書籍で、聖書が大いなる光で、エレン・ホワイトの書物は小さな光なのだと宣言されてきた。

具体的に人間がつけた見出しを挙げてみよう：セレクトッド・メッセージ 3 巻の 30 頁 (1980 年版) は次のようになっている。「小さな光である E. G. ホワイトの書物と聖書との関係」

この見出しのすぐ後にレビュー誌からの引用文がある。「彼らは聖書に心を留めなかった。そこで神は人々を大きな光へ導くために小さい光をお与えになった」レビュー誌 1903 年 1 月 20 日。

## 文脈

.....

あなたに質問したい。あなたはこの文の前後関係を読んだことがあるか？ この文を読むときに、レビュー誌の記事の目的に注意していただきたい。初めから終わりまで、彼女は自らの書物の販売を促進しているのである。誰に対してであろうか？世の人に対してである。なぜか？彼らを大きな光である救い主に導くためである！

この文脈を読むときに注意して頂きたい：

「わたしは、兄弟姉妹たちがキリストの実物教訓の配布に興味を持っていることに対して天の父に感謝する。この本の販売によって素晴らしいことがなされてきた。そして、それは継続されるべきである。しかし、わが民の努力はこの本一つに限られてはならない。人類のあけぼの、大争闘、各時代の希望のようなもっと大きな本が、どこでも配布されなければならない。これらの本は、全世

界で伝えられなければならないこの時代の真理を包含している。何者も、これらの本の販売を妨げてはならない。

もしも、教会員がこれらの本に含まれている真理の重要性に目ざめていたなら、そしてわが民がこれらの本をまき散らす義務を感じていたなら、もっとこれらの大きな本が売っていたであろう。

ホワイト夫人がこれらの書物の創作者ではない。これらの書物には、神が彼女の働きの期間を通してお与えになった教えが含まれている。これらには神が世の人々にお与えになった尊い慰めの光が盛られている。それらの書物から、男女の心を救い主に導く光が輝かなければならない。主は、これらの本は全世界に散らされなければならないと仰せになった。これらには、受け入れる者に、命から命に至らせるかおりとなる真理が盛られている。それらは神のための沈黙の証人である。過去において、それらは魂を悔い改めさせる神の手段であった。多くの者がそれらを熱心に読んで、キリストのあがないの効力と真理の力を見るように導かれた。主は、ご自分の民にたくさんの教えを教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則、ここにも少し、そこにも少しと送られた。聖書にあまり注意が払われていない。主は男女を大きな光に導くために小さな光を与えられたのであ

る」CM(文書伝道)124。

エレン・ホワイトのある書物は、広く一般に配布されるように計画された。何故か？ これらの書面から男女を救い主に導く光が輝き出なければならないからである。そう言って、彼女はすぐ後に同じ思想を表明している：

つまり、世の人々が聖書をないがしろにしたので、主は大きな光に導くという目的のために、小さな光を与えられたのだと。

エレン・ホワイトは、ご自分の書き物は、尊い靈感を受けたものだが、世の人を大きな光である救い主でありイエスに導くための小さな光として指している。もしも、この文が多くの方が信じているように、大きな光が聖書であるという意味であるとするなら、他のすべての個所で大きな光はキリストであると定義していることと調和しないのである。従って、これらの記事から、エレン・ホワイトは彼女の書物が聖書に対して劣ったものであると卑しめているのではないことを結論づけることができる。

セレクトッド・メッセージ3巻、30頁で言うように、聖霊が彼女の書物の著者であるなら、また、レビュー誌1903年1月20日号にあるように、彼女の

書き物の創作者は神であるなら、エレン・ホワイトの書物は第二級品であると教えているのは誰の仕業であろうか？それは預言の霊を効果のないものにしようとする我が教会内のサタンに使われているリベラル派（自由主義者）たちの仕業に他ならない。エレン・ホワイトは古代の預言者たちと同じように、同じ神の聖霊によって教えられたのである。もし預言者中、最も偉大なバプテスマのヨハネが小さい光であるなら、聖書の預言者たちはすべて小さな光であることは確かである。キリストだけが大きな光である。

## 自然からの例証

.....

創造の物語に、小さい光と大きい光の差を理解する助けとなる興味深い例証がある。それは創世記 1:16 に見出される。「神は二つの大きな光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星を造られた。」

私はジョン・ジャニューク著「大争闘、その終焉のゲーム # 3 p23, 24」の言葉に注意を促された。

彼は、この聖句の文脈に二つの質問が答えられていると言う。すなわち、①大きな光とは何か。答えは昼をつかさどる太陽である。太陽はそれ自体オリジナル

の光を持って、光を放出しているので大きな光である。  
②夜をつかさどる小さな光とは何か。月である。月はそれ自体に光を持っているだろうか。答えはノーである。月ができることは、太陽の光を反射することだけである。

大きな光はそれ自体光を持っているが、小さな光はその光を反射するだけである。月を何千と集めても、決して大きな光になることはできない。大きな光、すなわち太陽自体が光なのである！

聖書の著者とエレン・ホワイトは、彼ら自身に光はないのだとジャンニークは結論づけている。月のように、彼らはただ**義の太陽であるイエス・キリスト**のオリジナルの光を反映するだけである。

霊的に考えると、キリストは義の太陽である。マラキ 4:2 に次のように書かれている：

「しかしわが名を恐れるあなたがたには、**義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。**あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出て、とびはねる」。

イエス・キリストが義の太陽である。その翼に癒す力を備えていると言うのである。イエスは生命の光である。

各時代の希望 2 巻 250、251 頁に次のように描写されている：

「イエスは、また人々に語ってこう言われた、『わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう』(ヨハネ 8:12)。

イエスは、このことばを語られたとき、仮庵の祭の儀式に特に関係のある宮の庭におられた。この庭の中央には二つの高い台が立っていて、大きなランプがのっていた。夕べのいけにえのあとで、全部のランプに火がともされ、エルサレムじゅうに光を放った。この儀式は、荒野のイスラエルをみちびいた光の柱を記念するものであり、またメシヤの来臨をさし示すものとみなされた。夕方になってランプがともされると、宮の庭は非常なよろこびと楽しみ場となった。。。。

エルサレムの照明を通して、民は、メシヤが来臨されてイスラエルに光を放たれるという彼らの望みを表明した。しかしイエスにとって、この光景はもっと深い意味があった。宮の輝くランプが彼らのまわりを照したように、霊的な光のみなもとであられるキリストは、世の暗黒を照されるのである。それでもまだこの象徴は不完全であった。キリストがご自分の手で天におかれたあの大きな

る光こそ、キリストの使命の栄光をもっと真実にあらわすものであった」。

同じ思想が「両親と教師と学生への勧告」54 頁に表わされている：

「天に上る太陽は、造られたすべてのものの生命であり光であるお方を表わしている。」

## 義の太陽を反射する

.....

しかし、人類は世の救いのために果たさなければならない役割があることを覚えていなければならない。イエスは言われた：「あなたがたは世の光である」と。しかし、人類自身には光がない。人類は太陽でなく、月にたとえられている。人類はイエスの光を反映するだけである。

祝福の山 49、50 頁から引用しよう：

「人類はそれ自身のうちに光をもっていない。キリストから離れるならば、わたしたちは火がともっていない灯心のようにであり、太陽に顔をそむけた月のようである。したがって暗い世界にただ

一筋の光を与えることもできない。しかし、わたしたちが義の太陽に向かい、キリストと接触する時、神の臨在の輝きによって全心が燃やされるのである。

キリストの弟子は人々の間にある一つの光以上のものでなければならない。かれらは世の光である」。

月のように、すべての人類は、預言者であろうと、祭司であろうと、王であろうとみな小さな光である。しかし、彼らが顔をキリストに向けて、キリストとつながるとき、世に対して神の光を反映することができるのである。

「神と共なる今日」93 頁から引用する：

「光の源であられるお方とつながり、この生きたつながりを通して世の光となることは、クリスチャンの特権である。生きとし生けるものにとって、太陽の光は光であり祝福となっているように、クリスチャンも、彼らの善行と快活さと勇氣によって、世の光となるべきである。太陽の光が夜の陰を追いやり、谷間や丘にその輝きを注ぐように、クリスチャンも自ら輝く義の太陽を反射するようになるであろう」。

美しい引用文ではないだろうか？ 義の太陽から輝

き出る光を反射するとは、何という特権であろうか！

「主を知るために」という本の 341 頁には、次のような助言がある：

「すべての光の源であられるお方からの照明を、確実に受けなさい。彼が全天の偉大な中心的光であられ、世の光であられる」。

この美しい勧告が我々一人ひとりの内に成就されることを願うものである。クリスチャン品性という気高い威厳が太陽のように輝き出て、キリストのみ顔からの光線が、キリストの純潔に至るまで自らを清くした者たちの上に反映されるのである。

「義の太陽が上ったことを常に覚えていなさい。我らの義であられるキリストが、我々を明るく照らしておられる」7BC932。

親愛なる皆様、キリストがこの事をなさるのは、我々を愛しておられるからである。

更にバイブル・コメンタリー 6 巻 1118 頁を読みたい：

「キリストは、『教会を愛してそのためにご自身をささげられた』。教会は彼の血によって買い取られた。神の御子が七つの燭台の間を歩いているの

が見られた。イエスご自身が、これらの燃えているランプに油を補給なさるのである。その炎を点じられるのは彼である。『この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった』。

どの燭台も教会も自分で輝くのではない。キリストから、その光のすべてが発せられている。

再び、セレクトッド・メッセージ 2 巻の 249 頁において、次のように約束されている：

「試練は厳しいものかもしれないが、一瞬一瞬イエスを見つめなさい。苦闘するためではなく、彼の愛の内に安んじるために、彼はあなたのことを気にかけて下さっているのである。試練が押し迫れば迫るほど、希望が更に強まることを我々は知っている。義の太陽の光線が、そのいやす力をもってあなたの心を照らすであろう。雲のかなたにある輝き、すなわち義の太陽の光を見なさい」。

## 証を無効にする

.....

さて、これらの輝かしい真理を前にして、我々は教会に与えられてきた損害についてよりよい理解を得ることができる。それは、誤解または様々な方法を通して、エレン・ホワイトの書き物が聖書よりも劣った光

として格下げされてきているということである。証の書が教会員によって尊重され、研究されるとき、神の教会にとってそれはものすごい祝福、励みとなることを、サタンは理解している。この誤解こそ、残りの教会に対する神の使者の職務を傷つけようとする、サタンの一手段である。それはついに多くの人たちの生涯において、彼女の書き物を無効にするためなのである。

なぜなら、もしもサタンがこの方法によって、または暗に預言の霊を格下げすることができ、そうすることで証の書を本棚の上でほこりだらけにしておくことができるなら、神の民が彼の最後の欺瞞を見破ることはないだろうということを、彼は知っているからである。これらの最終欺瞞を、預言の霊は明確に指摘してくれているだけでなく、これを回避する方法をも我々に教えているのである。できることならサタンは我々全員を滅ぼそうともくろんでいることを、決して忘れないで頂きたい。

セレクトッド・メッセージ 1 巻 51 頁からの引用文を注意深く考慮していただきたい：

**「サタンの最後の惑わしは、神の霊の証を影響のないものにすることです。『預言（英訳、幻）がなければ、民はわがままにふるまう（英訳、民は滅ぶ）』（箴言 29:18）。サタンは巧みにいろいろ**

ろな方法で、種々の働きを通して神の残りの民の、真の証に対する確信を揺るがそうとして働くでしょう」。

友よ、最終時代の小さな光を軽んじることがないように。あるいはエレン・ホワイトの書き物を、神からの下等な光と見なすことがないようにしようではないか。

ここで正直に申し上げる。60年にわたり聖職にたずさわってきたが、セブンスデー・アドベンチスト教会での説教と伝道用に作製したすべてのテープの中で、私は常に聖書と証の書の両方を用いてきた。どちらも、同じ権威の源、すなわち聖霊に起因すると信じてきたからである。

## もう一つの重要な考察

.....

初めに、キリストがこの世界を創造なさったとき、彼はこの形なくむなしい地にご自身のいやしの光を据えられた。「神は『光あれ』と言われた。すると光があった。... 夕となり、また朝となった。第一日である」(創世記 1:3, 5)。その第一日には、太陽からの光も、月からの光もなかった。太陽と月が創造されたのは、第四日のことであった。それでも光はあった。その光は何

ものであったのか？ その光はまさに、創造主なるイエスご自身であった。そして新しくされた地において、新エルサレムでは、太陽からの光も月からの光も必要でなくなる時がやってくる。黙示録 21:23 を読んでみよう：

「都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである」

イエスは過去においても、現在も、また未来においても義の太陽であられる。我らの光である創造主は永遠のお方である！ 何という救い主であろう。御名を賛美せよ！

主の御名においてあなたに訴えたい。キリストにある勝利の絶対的確信を抱きつつ、来るべき危機に直面しようではないか。なぜなら我々は、預言の霊と聖書を、我々を救うことのできる唯一のお方、大きな光、すなわち義の太陽であられるイエス・キリストへと導く、小さな光として受けとめているからである。

第2部においては、しばしば文脈から外れて引用され、誤用されている預言の霊からの第2番目の一節を取り上げ、吟味しようと思う。神の民に関する限り、破壊的結果をもたらしかねない問題である。

## ～ 第2部 ～

### 序論

.....

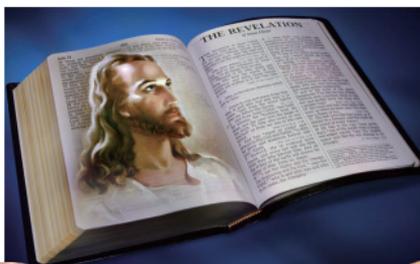
第1部で、しばしば文脈から外され、誤解され、誤用される二つの証の書の引用文について言及した。最初の一つは、レビュー・アンド・ヘラルド 1903年6月20日号に掲載された。次のように書かれている：

「聖書にあまりにも注意が向けられていない。主は男女をより大きな光に導くために、小さな光を与えられた。」

第1部で、エレン・ホワイトが明確に次の二つの用語を定義している参照文を幾つか読んだ。すべての預言者（聖書の預言者とエレン・ホワイトを含む）は「小さな光」であり、唯一の「大きな光」であるキリストへと我々を導くものであることを、彼女は明らかにしている。月が太陽の光を反射するように、自らの内に光を持たない預言者も、義の太陽であられるキリストからの光を反映することしかできない（預言の霊、第2巻、83、84参照）。

次に、もう一つの引用文について考察しよう。それ

## 大きな光



## 小さな光



は、「国と指導者」下巻、227 頁に見られる：

「講壇からは、聖書、そして聖書のみ言葉が語られなければならない」。

最後の危機が近づくにつれ、サタンは、証の書を神の残りの民からますます遠ざけようと躍起になっている。この一節を文脈内で吟味すると、ここでホワイト夫人が述べているのはセブンスデー・アドベンチスト教会の講壇のことではなく、SDA の牧師や働き人たちが、世の自称キリスト者たちの前に立つべき時のことであることがはっきりしてくる。「国と指導者」下巻の 224-228 頁あたりまで、ご自分で読まれると良い。そ

うすれば、どの講壇について述べられているのかが明白になるはずである。

同書の226, 227頁からしばらく引用することにする：

「人間の律法と主の戒めの間に、真理と誤りの間の大争闘の、最後の戦いが行われる。今われわれはこの戦い、すなわち至上権を争う教会間の争いではなくて、聖書の宗教と作り話や伝統的宗教との間の戦いに入っている。・・・キリスト教の柱石そのものである教理を拒否する者が多くいる。靈感を受けた筆者が記した創造、人類の堕落、贖罪、律法の永遠性などの偉大な事実はみな、自称キリスト教界の大半の人々が、否定したも同然の有様である。・・・

キリスト者は、やがて世界に、圧倒的驚きとして起ころうとしている事件の、準備をしなければならない。そして彼らは、神の言葉を忠実に研究して、その教えに生活を調和させようと努力することによって、この準備をしなければならない。・・・神はリバイバルと改革を求めておられる。講壇からは、聖書、そして聖書のみ言葉が語られなければならない。しかし聖書の力は奪い去られているので、その結果は霊的生活の低下となってあらわれている。今日の多くの説教は、良心を覚醒さ

せて魂に生命を与える、神の力に欠けている。…  
彼らの心に神の言葉を語ろう。これまでただ伝説  
と人間の説と、格言だけを聞いていた人々に、魂  
を新たに、永遠の生命に至らせることができ  
るかたの声を聞かせよう」。

「キリスト教の柱石そのものである教理を拒否する  
者が多くいる」との言葉は、SDA 教会について語られ  
たものだろうか。どの柱石のことか、ホワイト夫人は  
続けて述べている：

「靈感を受けた筆者が記した創造、人間の墮落、  
贖罪、律法の永遠性などの偉大な事実はみな、自  
称キリスト教界の大半の人々が、否定したも同然  
の有様である。」

これは、セブンスデー・アドベンチスト教会のこ  
とを述べているはずがない。なぜなら、真の SDA 信者は、  
「靈感を受けた筆者が記した創造、人間の墮落、贖罪、  
律法の永遠性」をみな信じるからである。「神はリバイ  
バルと改革を求めておられる」。この事を成し遂げるに  
は、自称キリスト教徒らに教えるとき、「聖書、そして  
聖書のみ言葉が語られなければならない」と言っ  
ているのである。エレン・ホワイトが「我々の講壇」と  
言わずに、ただ「講壇」と言っているところに注意さ  
れたい。

ある大きな教会の牧師たちが、神の民を証の書から遠ざけるためにこの短い文を誤用したのは、実に悲しむべきことである。私は引退後しばらく、南カリフォルニアのある大きな教会の長老であった。1,200名もの信者を有するこの教会で、牧師が長老たちに、説教に決して証の書を用いないように指示したのである。

## 伝道と証の書の使用

.....

確かに、自称キリスト者〔クリスチャン〕や未信者からなる聴衆の前で、エレン・ホワイトを引用するのは適切ではない。これについては、ホワイト夫人自身が、「教会への証」第5巻、669頁で勧告している：

「ある者たちが、賢明でない手順を踏んでいると私は述べた：未信者らに自分たちの信仰について語り、その証明を求められたとき、彼らは聖書から証明しようとしなくて、私の書き物を読んで聞かせたのである。この手順は無節操で、未信者らに真理に対する偏見を起こさせるものであることが私に示された。証の書は、その靈感について何も知らない人たちにとって、何の重みも持つことができない。このような場合、証の書を用いるべ

きではない」。

それで、私は牧師として、未信者に聖書研究を施すときや、伝道講演会などで語るときは、すべての主張をいつでも聖書から証明してきた。

「セレクトッド・メッセージ」第3巻、29頁を引用する：

「一般民衆に働きかけるときは、あなたの立場を支持するのに、ホワイト姉妹の書き物を、顕著な権威あるもののように引用してはいけません。このような事をして、証の書に対する信頼を増すことにはなりません。あなたの証拠を、神の言葉から明瞭な形で持ってきなさい。『主はこう言われる』こそが、人々に提示し得る最強の証なのです」。

世の自称キリスト者らの前で語る時、単に彼らを楽しませるために、一般の物語や逸話、あるいは世の報道雑誌からのグッド・ニュースなどを説教の題材にすべきでないことについても触れておこう。エレン・ホワイトは次のように言明している：

「これまで、伝説と人間の説と戒めばかりを聞いてきた人びとに、心を新たにして、永遠の命にいたらせる神の声〔聖書、そして聖書のみの言葉〕

を聞かせよう」実物教訓 17。

一般大衆の集まりにおいてエレン・ホワイトの書き物を用いるのは、適切でないと結論づけることができると思う。つまり伝道講演会や、誰かに聖書研究を施すとき、未信者や他教派の人と議論を交わすときなどにおいてである。

## 証の書を用いるべき時

.....

これまで証の書を用いるべきでない場合について述べてきたが、では、いつ用いるのが適切か？という質問の答えを見つけていきたいと思う。証の書を開けば、主はエレン・ホワイトに、証の書が読まれるべきであると指示なさっている場合が多くあることを認めるであろう。我々の講壇から、つまり我々の教会内だけでなく、キャンプ・ミーティングにおいても読まれるべきであると。

実例を幾つか挙げてみよう。イリノイ州でのキャンプ・ミーティングについて、「バトル・クリークからの手紙」49頁（セレクトッド・メッセージ 20頁）を引用する：

「私がコロラドへ行った時、あなた方のことが心配になって、体が弱っている中でキャンプ・ミーティングの時に読んでもらうように何ページも書きました(1881年9月)。力もなく、震えながら、午前三時に起きて書いたのです。神は土の器を通して語られました・・・」。

ところが、その手紙のことは完全に忘れられてしまった。キャンプ・ミーティングが終わり、次の世界総会までそれが読まれることはなかった。

エレン・ホワイトの伝記の中で、著者のアーサー・ホワイト氏は、彼女からこの証が届いたのはキャンプ・ミーティングの真っ最中のことであり、指導者たちが夫人の要請どおりに読むのを怠ったことについて、弁解の余地はなかったと述べている。

SDAの指導者たちが、神の霊の証を我々の講壇から読むことをできるだけ避けようとするのは、我々の時代に限ったことではなかったのである。エレン・ホワイト自身も、同様の問題に直面した。この証が当時のキャンプ・ミーティングで読まれることは、極めて急を要することであると彼女が感じていたことに、留意していただきたい。病気であったにもかかわらず、夜中の三時に起きてそれを書いたほどである。しかし、何ということか、キャンプ・ミーティングでは読まれ

なかったのである。「原稿8」の250と296頁に、オーストラリアのアボンデール・キャンプ・ミーティングで読んでもらうために、彼女が2巻ものぶ厚い原稿を送ったことが記されている。当時は良くある出来事であったのである。

キャンプ・ミーティングに証を送ることの他に、主はホワイト夫人に、教会にも会衆に読まれるための証を送るよう指示なさっている。彼女がミシガン州バトル・クリークに送った二つの証は、「教会への証」第5巻、45-84頁に保管されている。これらの証を送るよう主が彼女に指示なさったにもかかわらず、またも彼女はある問題に直面した。彼女の要請は数週間なおざりにされた。「教会への証」第5巻、62頁から引用する：

「バトル・クリークの兄弟姉妹方：

教会で読んでもらうようにとの要請と共に、私が○○兄弟に宛てて送った手紙は、兄弟がそれを受け取った後も、数週間あなた方に読まれることはなかったと理解しています。あの証を送る前、神の霊による印象を非常に強く受けたため、それをあなた方に書くまで、私の心は昼も夜も休まることはなかったのです」。

またも彼女は、この証が教会に持ち込まれることは極めて急を要すると感じたので、昼も夜も心が休まら

なかったのである。しかし、何ということか！急を要すると彼女が感じたにもかかわらず、最初の証は何週間も読まれることはなかった。

「教会への証」第5巻、61頁に、次のような勧告が載せられている。ここで彼女は、教会内のある問題を指摘している：

「多くの若い牧師たちと、幾人かの熟練した牧師たちは、神の言葉をなおざりにし、御霊の証をも軽視しています（それは今日も確かに見られる）。証に書かれていることを彼らは知っておらず、知ろうともしません。自分たちの品性の欠陥を悟り、正そうと望まないのです」。

ホワイト夫人は、次の証をバトル・クリークに送った。それは様々な勧告を含んでおり、教会で読まれることを意図したものであった。主要な重荷は、教会員に悔い改めを呼びかけることであった。彼らは霊的に死んだ状態にあり、自我を十字架につけ、悔い改めて改心する必要があると訴えている。教会は腐敗していると。彼らに直接語りかけるように、彼女は次のように続けている：

「『あなたの不義が、あなたがたと、あなたがたの神との間を隔て』たので、あなた方は、すべての

絡みつく罪をかなぐり捨てなくてははいけません」。

それから、こう警告している：

「もしも今の霊的状态が続くなら、あなた方の前途にあるのは悪い事ばかりであるとしか言いようがありません」。

エレン・ホワイトからのこれらの証が、我々の疑問に答えてくれる。「我々の講壇で証の書を用いるのは妥当だろうか？」罪を譴責し、その他様々な警告や勧告を与えてくれる預言の御霊の証が、彼女の時代に我々の教会の講壇から読まれることを主が要請なさったとしたら、我々の時代にそれが講壇で読まれることも、同様に妥当ではないだろうか。我々の教会やキャンプ・ミーティングで主からの勧告が読まれるのが、妥当でないということがあるだろうか。ましてや今日においては、1880年代におけるよりも、はるかにその事が必要とされているのではないだろうか。

ここで、我々の教会において聖書と証の書を併用することは、妥当であると結論づけるものである。すなわち：

・安息日学校において

- ・安息日礼拝において
- ・祈祷会において

証の書が読まれるのは、ふさわしいことなのである。

真理が追加されているわけではないが、神は証の書を通して、既に与えられている大真理をより分かりやすく提示なさった。そして、誰一人弁解の余地を残さないように、民を目覚めさせ、心に深く刻み付けるために、主はこのような方法をお選びになったのである。

であるから、誰一人恐れることなく、教会の講壇から証の書を読み上げようではないか。神よりも上手に勧告を与えられる人はいないのだから。

## 神からの証の拒絶

.....

さてここで、現代のイスラエルから古代イスラエルに目を転じてみよう。但し、この事例を効果的にするために、エレミヤを古代の預言者とは見なさずに、現代の生きた預言者とは見なすことにしたい。実際に彼は、

エレミヤ書 36：1-8, 18-23 に生々しく描写されている時代の預言者として活躍した：

「ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に主からこの言葉がエレミヤに臨んだ、『あなたは巻物を取り、わたしがあなたに語った日、すなわちヨシヤの日から今日に至るまで、イスラエルとユダと万国に関してあなたに語ったすべての言葉を、それにしるしなさい。ユダの家がわたしの下そうとしているすべての災を聞いて、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあろう。そうすれば、わたしはそのとがとその罪をゆるすかも知れない』。

そこでエレミヤはネリヤの子バルクを呼んだ。バルクはエレミヤの口述にしたがって、主が彼にお告げになった言葉をことごとく巻物に書きしるした。そしてエレミヤはバルクに命じて言った、『わたしは主の宮に行くことを妨げられている。それで、あなたが行って、断食の日に主の宮で、すべての民が聞いているところで、あなたがわたしの口述にしたがって、巻物に筆記した主の言葉を読みなさい。またユダの人々はその町々から来て聞いているところで、それを読みなさい。彼らは主の前に祈願をささげ、おのおのその悪い道を離れて帰ることもあろう。主がこの民に対して宣告された怒りと憤りは大きいからである』。こうして

ネリヤの子バラクはすべて預言者エレミヤが自分に命じたように、主の宮で、その巻物にかかれた主の言葉を読んだ。」

「バルクは彼らに答えた、『彼がわたしにこのすべての言葉を口述したので、わたしはそれを墨汁で巻物に書いたのです』。つかさたちはバルクに言った、『行って、エレミヤと一緒に身を隠しなさい。人に所在を知られてはなりません』。そこで彼らは巻物を書記エリシャマのへやに置いて庭にはいり、王のもとへ行って、このすべての言葉を王に告げたので、王はその巻物を持ってこさせるためにエホデをつかわした。エホデは書記エリシャマのへやから巻物を取ってきて、それを王と王のかたわらに立っているすべてのつかさたちに読みきかせた。時は〔ユダヤ暦の〕九月であって、王は冬の家に座していた。その前に炉があって火が燃えていた。エホデが三段か四段を読むと、王は小刀をもってそれを切り取り、炉の火に投げいれ、ついに巻物全部を炉の火で焼きつくした。」

これらの聖句は二つの点を例証している：主は預言者を任命なさって、宮〔教会〕で読まれるように、すなわち民の耳に聞こえるようにとの要請と共に、メッセージを書かせられた。次に、当時の指導者が取った態度について：彼自身とその民を目覚めさせて悔い改めに導き、彼らが赦しと救いを受けるようにと神が送

られた証を、この指導者は拒絶した。王は激怒して、エレミヤの証を燃やしてしまったのである。

## 驚くべき背教

.....

主が今日の SDA 教会、すなわち現代のイスラエルに送られた、牧師たちについての驚くべき引用文がある。それは「牧師への証」409, 410 頁に載っている。あまりにも背教が著しいため、このような驚くべき宣告が必要な場合も、時にはあると言わざるを得ない。次のように書かれている：

「聖化されていない牧師たちが、神に対抗して隊を組んでいます。彼らは同じ口で、キリストとこの世の神を賛美しているのです。・・・大いなる光と証拠を持っていた教会によって欺瞞と偽証の罪が大事にされるなら、その教会は、主が送られたメッセージを捨て、最も不合理な主張と偽りの仮説、偽りの理論を受け入れるでしょう。サタンは彼らの愚かさをあざ笑います。なぜなら彼は、何が真理かを知っているからです。

多くの人たちが、サタンの地獄のたいまつによって点火された偽りの預言という、たいまつを手に

持って、私たちの講壇に立つことでしょう。もしも疑いや不信が大事にされるなら、忠実な牧師たちは、何でも知っていると思い上がる民によって除かれることでしょう・・・」。

「教会への証」第5巻、77頁においても、この同じ主題が継続されている：

「神があなた方を、あなた方が愛している欺瞞に陥るままに任せられることはないなどと、誰が知るでしょうか。恩知らずの教会に平和の福音を最後に提示するのは、忠実かつ堅固で真実な説教者たちかもしれないと、誰が知るでしょうか。滅ぼす者たちが、既にサタンの下で訓練され、あとは数名の標準を掲げる人たちが離れていくのを待つばかりかもしれません。

それから彼らの場所にもぐり込み、主が平安を語っておられないときに、偽預言者と共に、『平安、平安』（エレミヤ6：14；8：11）と叫ぶのです。私はめったに泣くことはありませんが、今、私の目は涙で見えなくなっています。そして書きながらも、涙が紙の上に落ちているのです。やがて、私たちのうちにある預言する声がかごとく止み、民を覚醒させた声が、もはや彼らの肉のまどろみを邪魔することはなくなるかもしれません。

何という光景であろう。これらの予告は、今日成就されつつあるのではないだろうか。もしもエレン・ホワイトが、現在北アメリカ支部によって次々と設立されている新しい SDA 教会の状態を幻で見せられたとしたら、泣かすにはいられなかったはずである。目が見えなくなるほど涙を流したのも当然である。これらの新しい教会の多くは、典型的なセレブレーション〔祝典〕教会である。教会の指導者らはこの事実を否定するかもしれないが、それにもかかわらず、このような背教の目印をことごとく帯びているのである。音楽と叫び声と踊り〔ダンス〕でもって彼らが出す騒音は、きつとイエスご自身をも泣かせていることだろう。

主はご自分の預言者を通して、この悪魔的影響が、「恩恵期間が終了する直前に」我々の真っ只中に持ち込まれるようになることを予告なさった。「セレクトッド・メッセージ」第2巻、36 頁からの悲しい予告を考察されたい：

「あらゆる粗野なものが実演されるでしょう。ドラマの音楽や踊りと共に、叫び声上がるでしょう。理性的感覚があまりにもかき乱されるため、正しい決断を下すのに感覚に信頼することはできなくなります。そしてこれが、聖霊による感動と呼ばれるのです。

聖霊がそのような方法で、つまりそのような騒々しい状態でご自身を現されることは決してありません。これはサタンの発明であり、すべては純粹かつ真摯な、人を高め清める現代の真理を無効にするための隠ぺい作戦なのです。昨年の一月に私がキャンプ・ミーティングで目撃したような楽器演奏を取り入れるよりは、音楽を全く用いないで神を礼拝する方がましです。

現代の真理は、魂を回心させるその働きにおいて、この種の音楽を必要としません。騒々しい状態は感覚にショックを与え、正しく行われれば祝福となったはずのものを腐敗させてしまいます。悪魔的な作用により様々な騒がしい音が混ぜ合わされ、どんちゃん騒ぎを引き起こします。そしてこれが、聖霊の働きと称されるのです」。

現在のセレブレーション教会についてであるが、神への冒瀆となっているのは、そこで演奏される騒がしい音楽だけでなく、礼拝の一部であるといって繰り返される無分別な演劇もそうである。このような演劇は、神の言葉によりことごとくとがめられている。神は次のように勧告なさった：

「芝居がかったものは、何一つ取り入れてはいけません」(レビュー・アンド・ヘラルド 1907年 2月14日)。

もしもこれらの驚くべき警告が個人的に読まれたり、教会の講壇からまたはキャンプ・ミーティングで読まれたならば、我々はこの恐るべき背教に関与することを免れたかもしれない。我々は自らの怠慢によって神から送られた書き物を読まないだけでなく、イスラエルの王がしたように、事実上、神の言葉を火に投げ入れてはいないだろうか。

このような教会を次々と我々の真っ只中に設立することによって、ここ十数年間セレブレーション教会を増やしてきた挙句、現在、指導者らはこれまで以上の決意をもって、この礼拝形式を促進しようと努めているようである。

The North Pacific Union Gleaner という教会の広報誌の中に (1999年8月号)、ワシントン州バンクーバーにおけるオアシス・クリスチャン・センターの広告が載っていた。そこから引用してみる：「教会からは離れても、神様からは離れていない人たちにとって、まれに見る面白い場所です。いかした子供のプログラム、演劇、スウィング・バンド、その他。通常あなたが行く教会とは違います。是非、見に来てください」。ここで宣伝されているオアシス・クリスチャン・センターとは、セレブレーション教会の一つである。

先にも引用したが、セレクトッド・メッセージによ

ると、上のような形式はサタンの編み出したものである。「悪魔的な作用により様々な騒がしい音が混ぜ合わされ、どんちゃん騒ぎを引き起こします」。我々が教会内でのどんちゃん騒ぎを大目に見て、それを実施しているとは！これが、サタンの下で訓練されてきた「滅ぼす者たち」ではないのだろうか。再び、「牧師への証」 109, 110 頁から引用する。もう一度、このぞっとするような預言を読みたい：

「多くの人たちが、サタンの地獄のたいまつによって点火された偽りの預言というたいまつを持って、私たちの講壇に立つことでしょう」。

証の書からの文をもう一つだけ引用する。これはバトル・クリークの教会で読まれるようにと書かれたものであるが、今日の我々、特に残りの教会の指導者たちにも当てはまる：

「私たちの教会で責任ある地位にしながら、聖書の真理あるいは御霊の証よりも、数名の思い上がった哲学者の意見に信頼すべきであると考えている人たちがいます」（教会への証、第5巻、79頁）。

## あなたが聞きたいもの

.....

さてここで、思考を刺激する質問を投げかけてみたい。ある人たちにとっては、いまましい質問かもしれない：「サタンの地獄のたいまつによって点火された偽りの預言というたいまつを手にとって、私たちの講壇に立つ」多くの人たちの声と、神の靈感を受けた証を適切に引用しながら、講壇から聖書の真理を説く忠実な牧師たちの声の、どちらを聞きたいとあなたは思われるだろうか？よく考えていただきたい。・・・

主は、すべての偽の牧者に災いを宣告なさる！

「主は言われる、『わが牧場の羊を滅ぼし散らす牧者はわざわざいである』。それゆえイスラエルの神、主はわが民を養う牧者についてこう言われる、『あなたがたはわたしの群れを散らし、これを追いやって顧みなかった。見よ、わたしはあなたがたの悪しき行いによってあなたがたに報いると、主は言われる・・・』」（エレミヤ 23:1、2）。

次に、エゼキエル書 34：18, 19 を引用する：

「あなたがたは良き牧場で草を食い、その草の残りを足で踏み、また澄んだ水を飲み、その残りを足で濁すが、これは、あまりのことではないか。

わが羊はあなたがたが、足で踏んだものを食い、あなたがたの足で濁したものを、飲まなければならないのか」。

それゆえに、神は偽の牧者〔牧師〕らに災いをもたらされるであろう。このような時が来ているとしたら、神の忠実な牧師たちの義務は何であろう。イザヤは次のように述べている：

「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ」（イザヤ 58:1）。

「教会への証」第1巻、321頁において、主の僕は次のように勧告している：

「キリストが二度目においでになる直前の、この恐るべき時代に、神の忠実な伝道者たちは、バプテスマのヨハネよりも更に鋭い証を伝えなければならなくなるでしょう。責任ある、重要な働きが彼らの前途にあります。耳ざわりのよい事を語る者たちを、神はご自分の牧者とはお認めにならないでしょう。恐るべき災いが彼らに臨もうとしています」。

それゆえに、現代イスラエルの会衆と信徒に、「牧師への証」10頁を引用する：

「天から送られたメッセージを携えてやって来た神の僕について、誰一人不平を言うべきではありません。『彼らははっきり物を言いすぎる。言い方が強すぎる』と言って、これ以上彼らのあら探しをしてはいけません。彼らは強い言い方をするかもしれませんが、それが必要だからではないでしょうか。もしも聞く人たちが神の声またはメッセージに注意を払わないならば、神は彼らの耳に痛みを与えられることでしょう。神の言葉に抵抗する人たちを、神は責められるのです」。

最後の危機に直面するに当たり、我々は「セレクトェッド・メッセージ」第3巻、83, 84 頁を読むべきである：

「人々は次から次へとはかりごとをめぐらし、敵は魂をそそのかして真理から離れさせようと努めるでしょうが、主がホワイト姉妹を通して語られ、主が彼女にメッセージを与えられたと信じるすべての人は、最終時代にやって来るであろう多くの惑わしから安全に守られることでしょう」。

エレン・ホワイトが次のような手紙を書かなければならなかったとは、嘆かわしいことである。これは、聖霊が彼女になさせた働きの評判を傷つけようとする人たちに宛てられた手紙である：

「私はあなた方と、私が仕え、私がこよなく愛す

る大義をお持ちである主イエスに対する義務を果たそうと努力してきました。私があなた方に伝えた証は、実に、主が私に示してくださったものなのです。与えられた光をあなた方が拒んだことを、私は残念に思います。・・・

主が大いなる憐れみのうちに、あなた方が靈的にどのような状態にあるかをお示しになった故に、あなた方は主を裏切っているのでしょうか。主は心の目的をすべてご存知です。彼の御目から隠されているものは、何一つありません。あなた方は私を裏切っているのではありません。あなた方は、私に対して敵意を抱いているのではありません。あなた方に伝えるようにと私にメッセージを与えられた主に対して、あなた方は敵意を抱いているのです」(原稿、第5巻、139頁)。

上の手紙が書かれた同年の1903年に、彼女は、証に対する信仰を捨てる人たちについて、このように書いている：

「一つ確かな事があります：サタンの旗の下で立ち上がるこれらのセブンスデー・アドベンチストたちは、最初に、御霊の証に含まれている警告や譴責に対する信仰を捨てるということです」(セ

## レクテッド・メッセージ、第3巻、84頁。

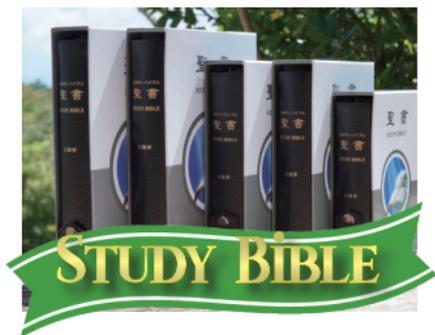
聖書や証の書をないがしろにするのではなく、むしろ熱心に、「主から何かお言葉があったか？」（エレミヤ 37：17）と尋ねようではないか。次に挙げる主からのお言葉は、エゼキエル 33：11 とエレミヤ 22：29 に見出される：

「あなたは彼らに言え、主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたはどのようにして死んでよかろうか」。

「ああ、地よ、地よ、地よ、主の言葉を聞けよ」。

もっと詳しく研究なされたい方のために...

.....



## スタディバイブル

口語訳・注解・  
脚注引照付き・地図  
チャート・聖句索引

¥8,000～

色はすべて黒で本革を使用

宇宙の謎、地球の謎、人生の謎に真実の解決を与えるのは聖書だけです。スタディバイブルは自分で研究できるように編集されています。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

小さな光と大きな光 - リバイバルシリーズ -

※頒布価格 100 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日  
著者 ローレンス・ネルソン  
発行所 サンライズミニストリー  
〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)

[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No. 10 預言の霊に関する指導原理

No. 11 サタンのわな

No. 12 人類が直面している世界情勢

No. 13 田舎の生活

No. 14 十戒

No. 15 主のぶどう園

No. 16 背教のアルファ

No. 17 終わりの時に備えよ

No. 18 どのようにして安息日を守るのか

No. 19 キリスト論

No. 20 救いの確証

No. 21 もうひとつの箱船

